

=====  
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

=====  
AA 研共同利用・共同研究課題「死の人類学再考：変容する現実の人類学的手法による探究」2021年度第3回研究会

日時：2021年10月17日（日）13:30-19:00

場所：306

13:30～15:30

田中大介「COVID-19の発生に対する葬儀業の初動と展開」

15:30～17:30

磯野真穂「コロナ禍において死はいかに消費されたか—新型コロナをめぐる痛ましい死の発生機序—」

17:30-19:00

総合討論

要旨

「COVID-19の発生に対する葬儀業の初動と展開」

田中大介

COVID-19（新型コロナウイルス感染症）のパンデミックという困難な状況下で、わが国の葬儀業は多岐にわたる活動を展開して現在に至る。単一の企業体を探りあげた限定的な事実関係の捕捉ではあるが、本発表ではその業務活動を事例研究の形式で提示した。その目的は次の2点に大別される。第一に、パンデミックによる制約圧力が現代葬儀に与えた影響を探ること。第二に、多様なサービスを提供している葬儀業従事者が、前述の影響に対して抱いている視座を把握すること。これらの目的は同時に、今日的なデス・ワーク（死の仕事）を請け負う人びとの実践をもとにして、現代の死と弔いの様相を省察する企図にもつながっている。

周知の通り、COVID-19のパンデミックは社会の隅々にネガティブな影響を及ぼしてきた。本発表で言及する情報は主として2020年度におけるパンデミックの初期段階に関する内容であるが、その時点から今日まで続く不安は端的な医学・疫学・公衆衛生の枠組みを超えた多元的問題を引き起こしていることは厳然たる事実と言わざるを得ない。学校や会社に行くことができないという状況が「そもそも対面コミュニケーションは教育や仕事にとって必要なのか」という疑義を、何らかの接触を伴うと定められた宗教儀礼を遂行できないという状況が「そもそも身体的な接触が信仰にとって不可欠なのか」という議論を惹起するように、感染防御のための行動制約が生活のさまざまな局面で社会通念や規範観念を根

底から揺さぶりながら、「そもそも論」を社会と個人の双方に突きつけている。

ところで、現代葬儀は常にこのような「そもそも論」の影響下にあったと見なすこともできる。上述に倣うと、「そもそも死者を弔うことはどうあるべきなのか」そして「葬儀とは何のために、誰のために行うものなのか」という議論は、葬儀業が商業的サービスの範疇で葬儀を請け負うようになってからは反復的に登場しており、それらの言説の多くは葬儀批判であると同時に産業化批判の体裁を伴うと言ってよい。特にパンデミックの危機感が醸成された始めた序盤においては「COVID-19 に感染した遺体を『汚染したモノ』のように扱うことしかできず、それがパンデミックの陰惨な光景をよく示している」という語り口が上記の批判的言説と融合して各種メディアで盛んに報じられた。

一方、直接的・間接的の何れにしても、このような批判の視線を継続的に受けとめながら、葬儀業従事者は「自分たちがすることになっているから」という文脈に自らの仕事を乗せつつ、単なる処理や手続を超えた次元で遺体に接し、また弔いとして成立させようとする。本発表ではその行動機制をうみだす力学と背景について中心的な事例提示を割き、最後に現代的な死を覆っている「よい死」の設計をめぐる欲動についての議論と接合させて社会—文化的な敷衍を試みた。

## 「コロナ禍において死はいかに消費されたか —新型コロナをめぐる痛ましい死の発生機序—」

磯野真穂

新型コロナウイルスによる死においては、感染予防のために看取りにも火葬にも立ち合えないといったことがセンセーショナルに語られた。本発表はこのような死のあり方が「ファクト」として流布した理由を文化、報道、近代社会における死、及びリスクに付随する責任の観点から分析したものである。

メディカルジャーナリズム研究会（2020/5/9）の報告によると、新型コロナウイルスは圧倒的な数の記事や動画を生み出し、それらは瞬く間に拡散された。例えば国内では、新型コロナウイルスが話題となりはじめた年明けから、緊急事態宣言を経た4月末までのわずか4ヵ月の間に43万件近い記事や動画が作成され、それらが多くのエンゲージメントを得た。

これら記事の中で圧倒的なエンゲージメントを得たのが志村けんさん逝去のニュースである。新型コロナウイルスに関するコンテンツにおいて、全エンゲージメント量トップ3は全て志村さんに関連するものであり、彼の死の3月29日以降、銀座や六本木などの都内の繁華街で人の出が大幅に減ったことが確認された。もちろん直接の因果関係は調べようがないが、圧倒的な量とスピードで拡散された彼の死に関するコンテンツがこの激減に無関係であるとは言い難いと研究会は結論づける。2020年4月23日に逝去した女優の岡江久美子さん逝去に関するコンテンツも志村さんほどではなかったものの、圧倒的なエン

ゲージメントを得た。彼女が亡くなった週の 2020 年 4 月 20 日（月）から 4 月 26 日（金）において、もっともエンゲージメントを獲得したコンテンツのトップ 10 のうち 4 つが岡江さんの死を扱うニュースである。冒頭で紹介した言葉から伺えるように彼女の死も志村さんと同様にただならぬ影響を社会に与えたといっていよう。

二人の死を通じ日本社会に共有された新型コロナウイルスの「ファクト」（それが正しいか、正しくないかはさておき）は次の二つといえる。一つには、このウイルスに感染すると瞬く間に悪化し死亡する場合があること。二つには、死亡した場合、感染予防のために最後のお別れどころか火葬にすら立ち会うことができず、多くの場合葬儀も執り行えないということである。本発表ではこの 2 つ目の状況を「新型コロナウイルスをめぐる痛ましい死」と名付けた上で、(1) 痛ましい死はどのように作られるのか、(2) お二人の死のコンテンツが瞬く間に拡散されたことは何を意味するのかを考察した。

本発表は次のように構成された。まず人類学における死の研究がどのようになされてきたのかの概略を踏まえた上で、日本人の死生観についての先行研究を踏まえた上で、新型コロナウイルスをめぐる痛ましい死はどのように作られたのかを新型コロナウイルスによる死亡の際のガイドライン、マニュアルを参照しながら検討する。その上で、凄まじいエンゲージメントを叩き出した二人の死の社会的な意味を人類学者のジェフリー・ゴラー（Geoffrey Gorer）の見解をもとに検討した。